

社会的状況における子育て環境 —— 学生の意識調査を通して ——

Consideration of parenting environment in social situation
—— Surver of junior college student's attituder ——

中 島 啓 子*

Keiko NAKAJIMA

I. は じ め に

現代の情報化社会の中で、現在の在籍学生の乳幼児期と比べると、現代の子育て環境に大きな変化がもたらされてきている。乳幼児を取り巻く育児環境の変化では、メディア環境の影響が挙げられる。「保育所保育指針」の改訂に伴い、現代における乳幼児の子育て環境についての変化を情報メディアの状況から考えてみたい。メディア環境の影響の変化の中でも携帯電話やDVDを視聴することの影響について、学生が課題に取り組んだ。その際、多くの学生はメディア環境の中での乳児の育児に対する難しさや親の意識について、問題意識を持っていった。

本学科の在籍学生は将来保育士、幼稚園教諭、保育教諭、小学校教諭を目指す学生が大半を示す。将来の職業も考慮して、アンケートに回答した学生の意識調査を分析しながら、乳幼児における情報メディアの利用について考察を深めたい。「保育所保育指針」、講義内での学生の乳幼児の育児環境に対する意見、アンケート調査の分析をもとに、全国的乳幼児の親子のメディア活用調査も参考にしながら考察していくこととする。

II. 「保育所保育指針」の内容

平成27年12月に社会保障審議会児童部会保育専門委員会が設立され、「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」を受け、新たに保育所保育指針（平成29年厚生労働省告示第117号）が公示され、平成30年4月1日より適用されることとなった。内容を乳幼児に限定してみていくことにする。

① 乳児保育に関する基本的事項

基本的事項の項目では、(ア)で「乳幼児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。」とされる。また「乳幼児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。」と挙げられている。

*北翔大学短期大学部こども学科

乳幼児の時期は特に視覚の発達、最も著しい時期である。そんな著しい時期であるからこそ、視覚から取り入れる刺激に対しては、身近で関わる大人が慎重に考慮して扱わなければならない。そして、喃語や初語が表現される時期においては、大人の応答的な関わりが喃語の発する発達をより一層促し、情緒的安定や応答への喜びの感情が育まれる大事な時期でもある。

さらに乳保育のねらいや発達に関する視点をみていくと、下記の内容が挙げられている。

② 乳児保育のねらい

ねらいでは健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力に基盤を培うことが挙げられている。そのためには、穏やかで安定した環境を作り出すことが必要であろう。

その中で乳幼児は、自らの働きかけによる経験を生むことになる。穏やかな環境は家庭や保育現場で整えていくべき問題であろう。

③ 社会的発達に関する視点

ねらいでは、安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる事や、体の動きや表情、発声等によって、気持ちを通わせようとする事が挙げられている。身近な人との生活から一緒にいる喜びや発する言葉や感情への応答が、何よりの自分への自尊感情に繋がっていくと言うことである。乳幼児が発する言葉に対して、応答してくれるのは身近な人であり、決して一方的なものであってはならない。

ねらいや視点で述べられているように、応答的な穏やかな環境を整えて行く必要がある。

Ⅲ. 情報メディアと乳幼児の育児に関する学生の感想

情報メディアから人々が様々な情報を得ている現代社会の中で、情報メディアに接触することによって大人の生活スタイルが大きく変わってきていることを「赤ちゃん学を学ぶ人のために」の記述の中で旦直子・開一夫両氏は述べている。家庭でのテレビの普及に伴って、乳幼児期の子どもに与えるテレビの乳幼児に対する影響の研究がなされてきた。“子どもに良い放送”プロジェクトの中間報告では、1週間で少しでも視聴した割合は0歳時点で97%（中井他）に達していると報告されている。さらに赤ちゃんは1日に「ながら視聴」も含め平均1時間8分という調査結果もある。また、1999年のアメリカ小児科学会は「2歳以下の子どもにTVを見せることは推奨できない」「年長児でも1日1～2時間以内の教育番組が望ましい」と提言した。そして、2004年には日本小児科医会と日本小児科学会においても、子どもとメディアについての提言がなされた。早くから視聴に関する提言が行われてきていた。

赤ちゃんの発達についての講義において、情報メディアと育児の関係性について、学生に対して情報メディアと育児について考える機会を設定した。学生は本や主にインターネットの検索等を利用して課題に取り組んでいった。

乳幼児と情報メディアの関係の記述内容を、大きく6観点にまとめることができた。

(1) 健康への影響

- ・メディアの影響については、視力の低下などを予想していたのですが、「気持ち」の面に
関しても影響が出ると知り、深刻な問題だと思いました。
- ・携帯電話からは、強い電磁波が出ていて赤ちゃんが浴びてしまうと脳に影響が出て、睡眠
時間が減るといふ、様々な体に悪い影響が出てくることを調べてよくわかりました。電磁
波が及ぼす影響はとても怖いものだと感じました。
- ・健康面はもちろん、精神面や情緒面でも大きく影響するということを改めて感じた。

自ら調べることで、改めて視聴することの影響について知ったという学生も少なくなかった。
学生は少なからずテレビやDVD、携帯電話が乳幼児に与える影響はあるのではないかと想
像しても、実際の影響について今まで調べる機会がなく、曖昧だった予想がはっきりとしてき
た訳である。また調べた学生の多くが、情報メディアが乳幼児の健康へ及ぼす影響を心配する
感想を持った。

(2) 愛着形成への影響

- ・親子の絆の形成に障害が現れると記載されていましたが、私は度が過ぎると愛着障害にも
繋がると思います。
- ・スマホをいじりながら授乳している母親は、愛情を持って育てているつもりでも、赤ちゃ
んからのサインに全く気付くことができないので、愛着関係にまで影響が出てくるのかと
改めて知りました。

調べを進めていくうちに、子育て家庭における携帯電話の利用が増えているという現代の現
状にも気づいていった。多くの記述の内容には、「携帯電話」の使用に関係した意見が記述さ
れていた。携帯電話の視聴の一方的な発信により、親との応答関係が希薄になることに危機感
を感じていた。視聴を続けることで、愛着形成等の親子関係の形成を懸念する考えも見られた。

(3) アルバイト先や電車での出来事

- ・バイト先でもスマホをいじっている子どもはちょくちょく見かけます。見る時も子どもは
自分で持っているため、スマホとの距離が近かったりします。調べた際、スマホにはブルー
ライトが発信されているらしいので、目が悪くなってしまふなと思ひ…。
- ・最近よく電車やバイト先でスマホをいじっている親や、スマホや小型DVDプレーヤーで
アニメやビデオを見ている子どもを見かけます。電車の中で子どもがぐずっているのに親
はスマホを見ながら子どもをあやしていました。

最近街中でも子守の道具の一つとして携帯電話を使っている親を多く見かける。また携帯
電話を見るのに親が夢中で、視線が子どもに向けられていないという状況を見かけることも少
なくない。社会が泣く幼児やぐずる赤ちゃんに対して、迷惑な態度を示す傾向があり、寛大な
環境を作っていないのではないかとと思われる。天気の良い日の公園をベビーカーに子どもを乗

せ散歩中の親子を見かけた。その子どもは手に携帯電話持って、動画のようなものを見ていた。母親は無言で子どもに関心を示すことなく、周囲を見ながら、ベビーカーを押して歩いていた。また、外食した際に個別な行動をとっていた親子に出会った。注文した料理が来るまで、父親は携帯電話でゲームに興じ、母親は通販サイトを見ているような感じであった。大きい子どもはゲーム機を動かし、もう一方の乳児は寝かされ宙を見ながら手足をばたつかせ喃語を発していた。料理が揃うまで親子の会話は全くなかった。ゲームに夢中になるのは、分からないでもないが、喃語で語りかける乳幼児には、母親の反応がないことには落胆を覚えた。通勤にバスや地下鉄を利用するが、通勤帰りの夕方の地下鉄内では、7割以上の乗客が携帯電話を手に行っている状況を目にする。どんな用途で使っているのか知る事はできないが、使用者年齢は若者に限ったことではなく、中高年にも見られる傾向にある。大人は時間つぶしに使用しているようにも感じるが、携帯電話に対してすでに依存傾向にあるようにも思える。

(4) 親の携帯電話の使用

- ・携帯電話が便利になってきているので、ゲームをしたり、LINEをしたり携帯電話を手離すことが出来ない保護者が多い気がします。

親が携帯電話に依存している状況についての意見も多く述べられてあった。携帯電話に対しては、若者だけではなく、高齢化社会の状況からか使用する人口が全体的傾向となり、使っていない人口の方が少ない。

(5) 自分の幼児期の振り返り

- ・子どもの時は、スマホというものがまだまだ普及しておらず、親も携帯電話を持っていなかったもので、今よりメディアというものが近くにあったような気がしません。しかし今の時代「スマホ子守」なんていう言葉があるくらいメディアに頼ることも多くなっています。
- ・ここまで携帯やSNSが普及すると、保護者も頼ってしまう場面が出てくると思う。視聽することの影響を、全ての親が理解しているかと言われるとそうではない。

まだ携帯電話の普及していない時代の自分の幼少期を振り返り、現代の育児と比較して述べている。学生の親の年代を考えると携帯電話の使用は少なかったと見られる。

(6) 将来の職業

- ・絵本や手遊びの良さや自分自身も考え直すことで、将来スマホ育児が減らせるようになればいけないと考えました。
- ・子どもが元気に過ごすために、どんな経験をさせたいのか保育者として考えながら、知識を保護者と共有していきたい。
- ・便利な物ばかりに頼らず、自らが赤ちゃんと目を合わせたり言葉をかけたりするなど、コミュニケーションを取ることが大切であると思います。

・乳児期は母や父からの声かけが大切で、沢山話しかけた方がよいと思います。直接関わっていった方が赤ちゃんにとって良い影響を及ぼしてくれるのではと思いました。

・メディアが子どもに与える悪影響を知っておく必要があると思いました。

将来の職業を意識して、現代の育児環境について危惧し、親子育児関係を真剣に考えていることが伝わってきた。保護者と乳幼児の成長を共有していきたいという意識を深め、保育現場では何を大事にしていくべきなのかを考えようとする機会となったようである。

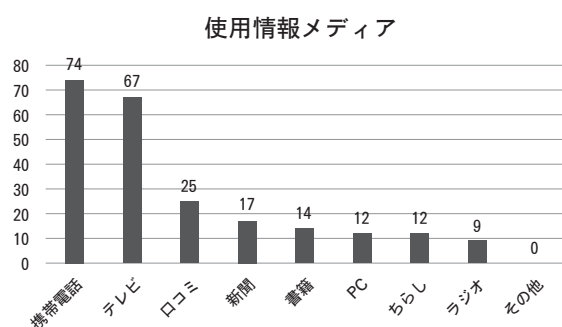
Ⅳ. 学生の情報メディアに関するアンケート調査の結果

講義内で「気になるニュース」の個人発表の時間を設定している。より多くの学生が世の中の動きに関心を持ち、広い視野を持ってもらいたいと考え、発表の場を設けている。情報を自ら得るための手段はどのようなものであろう。そこで学生がニュースの情報を得る現状を調査したいと考え、講義を受けている学生に「情報メディア」についてアンケート調査を行った。対象はニュース発表を行う学生である。

(1) 情報メディアの利用

① 利用している情報メディアについて

Q1 あなたが利用している情報メディアは何ですか。(複数回答)

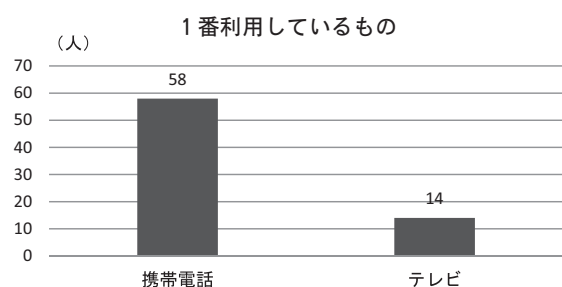


学生の生活環境として、自宅通学の学生と自炊生活の学生がいる。自炊生活の学生は新聞との関係性は薄いと予想していた。予想したとおり、新聞を購読している学生はおらず、情報を得にくい状況であった。図書館の新聞を利用する学生は時々いるようである。

9月上旬の震災の際には、ブラックアウトで停電の状況でニュース情報等を得ることが困難となり、不安になったという学生の声も多く聞かれた。情報が閉ざされるという今までにない状況を経験して、改めて情報の大切さ等について実感したようである。

② 一番利用しているメディアについて

Q2. Q1で一番利用しているのは何ですか。

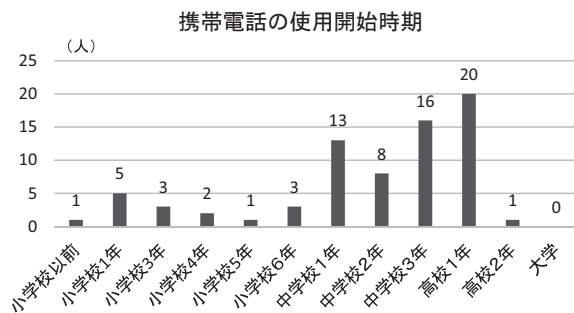


学生は、調べる際は携帯電話のインターネット機能を使っている。辞書代わりにして便利に有効活用している。国語辞典等は、実習に行く際に自参しているが、日常の講義では、使用している学生は全く見かけない。

学生の多くは、ニュースを調べる時は、情報源として携帯電話を使用し、「ネットニュース」を視聴する。社会状況では、新聞を購読していない家庭も少なくない傾向にある。休憩時間や空き時間に自習していない時は、学生が携帯電話の画面を見ている光景をよく目にする。

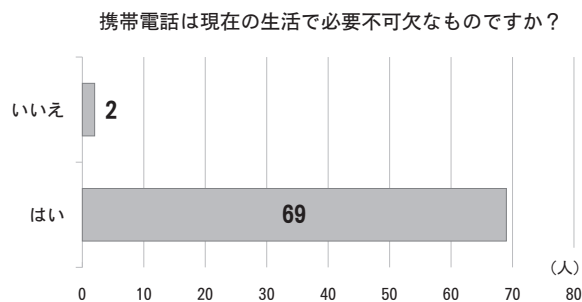
③ 携帯電話の使用を始めた時期について

Q3. あなたが携帯電話を使用した時期はいつですか。



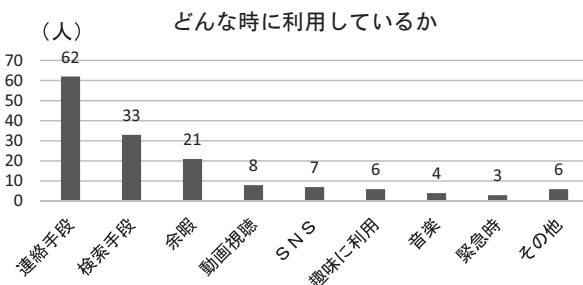
小学校低学年から使用している学生もいたが、多くの学生は中学生卒業までに、使用している。開始時期は、中学入学が転機になっているのかもしれない。高校入学までには、殆ど携帯電話は使用しているが、活用内容については調査対象内容には含まれていない。

④ 携帯電話は現在の生活において必要不可欠なものですか。



学生にとって生活の中で携帯電話の必要感は驚くほど高いものがある。今や依存傾向にある状況なのかもしれない。常に画面を眺めている学生の姿を休憩時に多く見かける。友人と集まっても話をしているというよりは、画面を見ている光景が多い。

⑤ どんな時によく利用しますか。

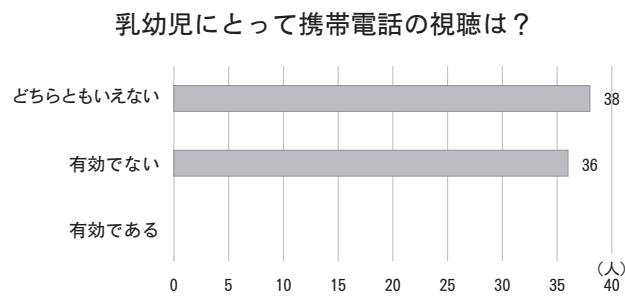


連絡手段としての活用が多い。話をするというよりは、メールを中心としたものが多く、LINEの活用による集団一斉連絡方法も多い。SNSの視聴も多く、コミュニケーションツールのひとつになっている。

携帯電話の使用目的の1番は、連絡手段としての利用があげられた。相手は家族や友人が多く、アルバイト先との連絡通信手段としても欠かせない現状があった。LINE等のグループ一斉連絡手段にも日頃から使用している。その次に多かったのは、検索手段としての使用である。学習やレポートを書く際に、国語辞書と同様の辞書機能の使用目的である。知りたい事をすぐに検索できる手段としても必要不可欠のようである。娯楽や趣味にもインターネット機能や

YouTube, ゲーム機能を使用している。その他には, 余暇の時間等にリフレッシュとして使用したり, 移動中や通学の時間, 就寝前の使用, 通販等にも使用したり, スケジュール管理にも利用したりしている。

「乳幼児の子育てにおける携帯電話のアプリや動画の視聴について, 学生はどのように考えているのか」という質問をすると下記の結果となった。



「有効ではない」とする考えと, 「どちらとも言えない」と考えが同じ割合を占めた。

また有効であるという考えは0人であった。

乳幼児にとって携帯電話の視聴(動画)は有効なのかという質問には「どちらとも言えない」とする回答と「有効でない」とする回答に二分された。しかし, 「有効である」という回答は0であった。どちらとも言えない面はあるが, 積極的に有効とは感じていないという考えがあるということである。

その内容を詳しくみると下記の意見がみられた。

〈乳幼児にとって有効ではないと考える理由〉

○健康面への懸念

- ・視力低下に繋がる
- ・ブルーライトの影響が心配である。
- ・脳への悪影響になるので心配である。

○遊び(体力)への懸念

- ・外で遊ぶことが大事であり, 携帯電話の玩具的扱いが気になる。

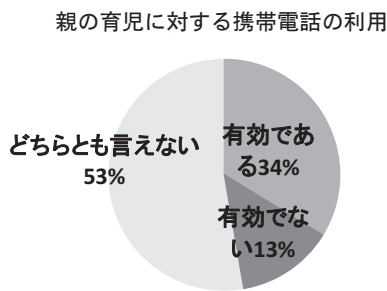
○愛着形成への懸念

- ・愛情的面での愛着形成の妨げになる。
- ・人との関わりがなく, コミュニケーションが希薄になる。

○その他

- ・依存的になる心配がある。
- ・現実と非現実の区別に影響があるのでは。
- ・空間認知の発達に問題がある。
- ・脳の発達の遅れに繋がるのではないか。
- ・以前はなかったので, 今も使用しなくてもよい。

「親の育児に対する携帯電話の使用について」は、下記の結果となった。



乳幼児にとっての利用では、有効であるという考えは0であったが、親の立場から考えると、有効であるという割合が増えた。

子どもに対する考え方と親の立場となると、「有効ではない」という割合が、1/4に大幅に減少した。その半面「有効である」の占める割合が増え、「どちらとも言えない」という割合も増えた。

その内容を詳しくみると下記の内容であった。

〈有効ではないとする理由〉

- ・親子関係で子どもとのコミュニケーションが少なくなる。
- ・子育てに使用すると依存性が出てくる。
- ・健康面を考えていると、有効ではない。
- ・子育て離れや育児放棄に繋がる。子育てが雑になる。

〈有効であるとする理由〉

- ・こまった時に使用できる便利さがある。
- ・子どもが落ち着く。親に時間に余裕ができるし、楽しく過ごすことができる。
- ・泣き止まずのに有効である。活用できるアプリが数多くある。

〈どちらともいえないとする理由〉

- ・静かにしていて欲しい時、一人の時間が欲しい時に有効である。しかし、有効だからこそ頼りすぎではいけない。頼りすぎのは良くないが、育児負担の軽減になるのではないか。
- ・保育のひとつの手段として使える。遊び道具として気軽に遊ばせられる。
- ・子育てに苦勞している親にとって、少しくらい頼った方が心に余裕ができる。
- ・公共の電車内では母親のためであっても、結局子どもを守ることになる。
- ・親は楽だが、教育的によくない。
- ・情報過多であり、育児とはいえない。

〈親が携帯電話を活用する有効な理由〉

- ・子育て友達（ママ友）と繋がる。子育ての情報源となる。
- ・親のストレスの発散になる。

という意見を挙げていた。親のストレス発散になるとする考えもあったが、親が育児で携帯電話に頼りすぎることに懸念する意見も挙げられた。

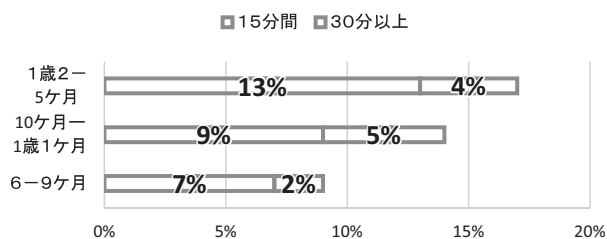
V. 乳幼児の親子のメディア活用調査

ベネッセ教育総合研究所は、2017年3月に東京、神奈川、千葉、埼玉在住の0歳6ヶ月～6歳までの乳幼児を持つ母親3400名を対象に行ったアンケート結果から乳幼児に絞って考えてみ

たい。この調査で携帯電話を乳幼児の母親の9割が使用しているという結果が出た。

二つのグラフは、平日におけるスマホの使用時間、テレビ・DVDの視聴時間の結果である。

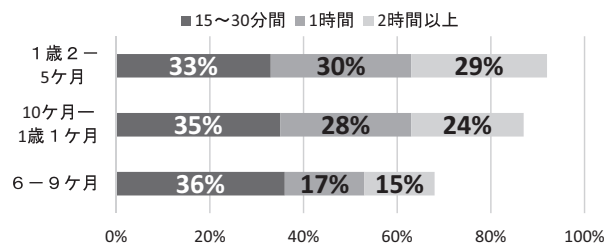
子どもとスマホはどれくらい使っている？（平日）



月齢による違いが見られ月齢が上がると使用する割合が増加する。これは機体を持ち、操作が可能になるからかもしれない。使用時間である15分間を長いとするのか短いとするのか判断が難しい。

テレビやDVDの視聴に対するアンケート結果は下記のものであった。

テレビやDVDをどのくらい見せている？（平日）



月齢が上がるとともに視聴する時間が急に長い傾向にある。内容までは結果が出ていないので、断言できないが、長時間になるのは、DVD等でのアニメ作品等の放映時間との関係が大きいのではないかと推察される。

親の携帯電話の乳幼児に対する使用割合が、2013年では使用割合が全体の60.5%で2017年には92.4%と増加した。この増加は子育てにおいて大きな影響を与えることに繋がる。大半の母親がメリットとデメリットを考慮して使用しているという結果も出ていたが、調査の結果からも乳幼児における携帯電話、テレビ、DVDの視聴時間に対する懸念がある。

しかし、乳幼児に対する健康被害が懸念されているが、現状では一定期間の調査結果が出ていない状況にある。

VI. おわりに

保育の分野でも、情報メディアの視聴時間が乳幼児に対して今後影響が出てくる事が懸念されている。その状況の中で、健康への影響や乳幼児とのコミュニケーションの大切さを、学生が改めて認識することで保育現場からの発信に期待したい。また、携帯電話の依存度が高い在籍学生に対しても育児への影響を再認識し、将来の職業の資質能力の向上にも役立ててもらいたい。日本小児科医会では、「スマホに子守をさせないで！」のポスターを小児科医院に配付しているが、保育現場や医療現場からの多方面に渡る発信や警告、連携が必要不可欠である。

家庭とは、気持ちを通わせ人と会話することを学ぶ場である。しかし、長時間視聴や長時間労働等で家族間の触れ合いの時間が奪われ続けるとしたら、子どもたちの発達への影響が大きな問題になってくるであろう。会話に双方向のやり取りがなければ、前頭前野が余り働かないといわれているのも医学的な事実である。これはメディアの影響が乳児の問題だけではなくな

てきている。2017年のベネッセ教育総合研究所が行った「児童生徒のメディア利用時間」の調査結果で、小学生から高校生で携帯電話やスマホの時間が増加していることが明らかになった。これらの状況を踏まえて、これから講義の内容に加えていきたいのは下記のものである。

- ・情報メディアを親が育児に使用している社会状況の事実を踏まえた上で、子育て環境を支援していかなければならない現状
- ・情報メディアに対する学生自身の対応や使用意識の見直し
- ・保育現場からの発信の必要性

日常生活の中での会話や言葉のやり取りが激減している現代の子育て状況の中で、子育て家庭と子育てを共有できる保育現場からの支援に期待していきたい。またそれを実践する学生のしっかりとした意識改革も必要である。

参 考 文 献

厚生労働省「保育所保育指針」2019

小西行郎・遠藤利彦「赤ちゃん学を学ぶ人のために 第11章」(世界思想社) 2015

東京大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター「だんだん親子になっていく」

ベネッセ教育総合研究所・共同研究「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト 2017

ベネッセホールディングス「第2回 乳幼児の親子のメディアに活用調査」2017

ベネッセ教育総合研究所「児童生徒のメディア利用時間」2017

無藤 隆 監修 宮里暁美 編集「領域 言葉 第8章」(萌文書林) 2018

瀧口 優「ことばと保育 第10章」(ひとなる書房) 2017

川端 強「絵本のある子育て」(こどもの本の童話館グループ) 2018

今井 和子「0歳児から6歳児 こどものことば 第3章」(小学館) 2017